

氏名	森 明香	助成金額	36万円
連絡先など	sd081031@g.hit-u.ac.jp		
助成のテーマ	川の傍に生きるということ—川辺川ダム建設反対運動の経験から—		

## 【調査研究の概要】

・川辺川ダムによる治水の“最大受益地”と国から想定される流域住民のダム反対の論理と構造を明らかにしたい。これを達成する手段として、2008年に「清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会」（手渡す会）が作成した「自然の営みを重視した総合治水対策」に至るまでの運動史を分析した。またダム反対の基盤となっている、川の傍に生きる生活実感に基づく認識について、聞き取り調査を通じて明らかにすることを試みた。この作業を通して、ダム反対の基盤は生活実感に基づく認識にあり、運動経験はその認識を他者にも伝達可能なたちへと体系化せしめたことがわかった。

## 【調査研究の経過】

・2013年4月 「手渡す会」主催の脱基本高水治水研究会への参加。手渡す会メンバー、人吉市、九地整八代国道河川工事事務所等へのインタビュー、資料収集。  
 ・5月～8月 東京にて収集資料の検討、資料渉猟。『脱「基本高水治水」研究誌』に寄稿。  
 ・9月 人吉市、山鹿市、熊本市でインタビュー/資料収集。  
 ・11月 4<sup>th</sup> ISESEAでの報告。  
 ・2014年1月 「手渡す会」事務所にてインタビュー、「手渡す会」定例会にて論文構想検討会。その後は論文執筆（継続中）。

## 球磨川流域



## 【今後の展望など】

今後は、今なお進化を遂げる思想を辿り、またその基盤となる川の傍で生きてきた経験の聞き取りを継続する作業を通して、河川行政の失敗を照射したい。川の傍で生きてきた人びとにとって、近代以降の河川管理の技術や概念は、どう総括されるのか。どう考え何を考える必要があるのか、川という自然がもたらす災害を減じながらも恵みを享受し続けて来た人びとの経験と思想形成とに学び、提言したい。

会計報告書の概要 (金額単位: 千円)			充当した資金の内訳		
支出費目	内 訳	支出金額	高木基金の助成金を充当	他の助成金等を充当	自己資金
旅費	3回往復航空券、移動(公共交通機関)、宿泊	212	112	100	0
資料費	書籍購入、資料請求	70	70	0	0
機材・備品費	文房具、プリンタインク、PC購入費	116	25	0	91
印刷費	史資料の複写やファックス	13	13	0	0
協力者謝礼など	宿泊謝礼品、調査協力謝礼品	11	11	0	0
その他	御礼や借りた資料の返送等郵送料	3	3	0	0
合 計		425	234	100	91

## 参考文献(ウェブサイトや書籍、成果物など)

- ・清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会 <http://tewatasukai.com/index.html>
- ・清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会 脱「基本高水治水」研究誌編集委員会 2013、『脱「基本高水治水」研究誌—自然の川を未来に手渡そう—』

# 川の傍に生きるということ —川辺川ダム建設反対運動の経験から—

高木仁三郎市民科学基金  
成果発表会  
森 明香

## 球磨川流域





川辺川ダム問題  
郡市民の会主催

**ミニ集会が始まる**

人吉市内で町内会ごとに

建設者の川辺川ダム計画（津良暢会長）が二十五日に疑問の声をあげている。日人吉市内の町内会ごとに清流球磨川・川辺川を未来に手渡す郡市民の会」ミニ集会を始めた。

初集は下青井町の町内会館、約二十人の住民が集まった。四国・早明新ダムは崩れる）を見た後、宮崎市の海水正武町公民館、上流に建設される川辺川ダムは、清流球磨川の生活を脅かす。ダムができて、清流がなくなると、清流球磨川を未来に手渡す会が発足した。市内西部の清流球磨川をめぐって、毎週一回のミニ集会が始まる。

1994年1月27日朝日新聞

「清流球磨川・川辺川を未来に手渡す郡市民の会」ミニ集会を始めた。

# 川辺川ダム 反対

熊本日日新聞

## 号外

詳しくは熊本日日新聞 朝夕刊をご覧ください



**蒲島知事が表明**

「地域の価値観尊重」

蒲島都天熊本知事はダムについて、計画を四十二年が経過した巨大十一日前開会した九月、白紙撤回し、ダムによる公共事業は、大きな経路定例県議会の本会議で、ない治水対策を追求すべ、を述べた。

国土交通省が相良村に「きた」と建設反対を正式、知事は、ダムの最大受託を計画している川辺川、表明した。計画発表から、各地の人吉市長、建設十



“受益地”住民のダム反対の論理と構造とは



# 方法:二つの作業

・総合治水対策とは

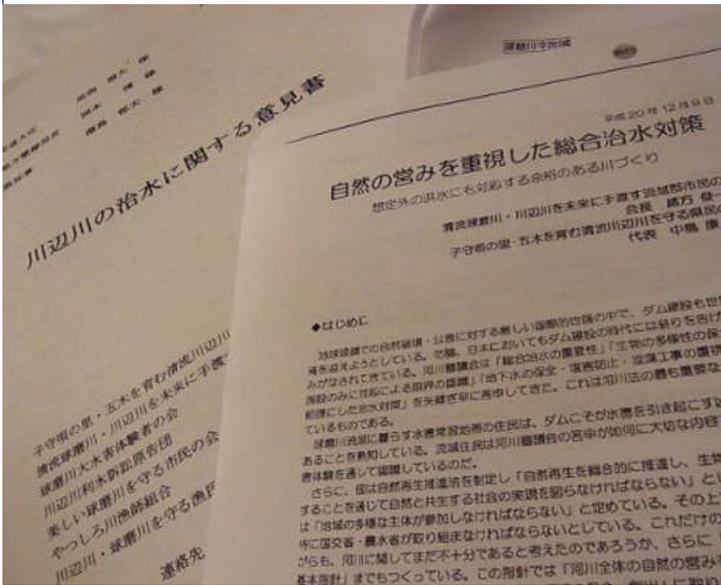
→流域住民が望む川を実現する水害対策

→運動の一つの到達点として

・川の傍での生活実感に基づく認識とは

→川の傍で代々暮らす人びとの、災害を減じつつ恵みを受け知る知恵

→川という自然をどのようなものと捉えているか



1950s

- 球磨川総合開発計画発表:本流に2基の発電ダム、1基の多目的ダム

1960s

- 3年連続の大水害、川辺川ダム計画発表

1970s

-水没予定地でのダム賛否をめぐる対立が先鋭化

1980s

- 水没予定地住民の多くが補償基準を妥結、反対派は収束

1990s

-中下流域でのダム反対住民運動団体が組織化  
流域内外に52の団体が結成、運動を展開

2000s

- 水没移転代替地が完成

- 流域首長や県知事らがダム計画白紙撤回を求める

- ダムによらない治水を考える場の開催

# 立場の異なる人びとが 四つ巴の運動の運動を展開

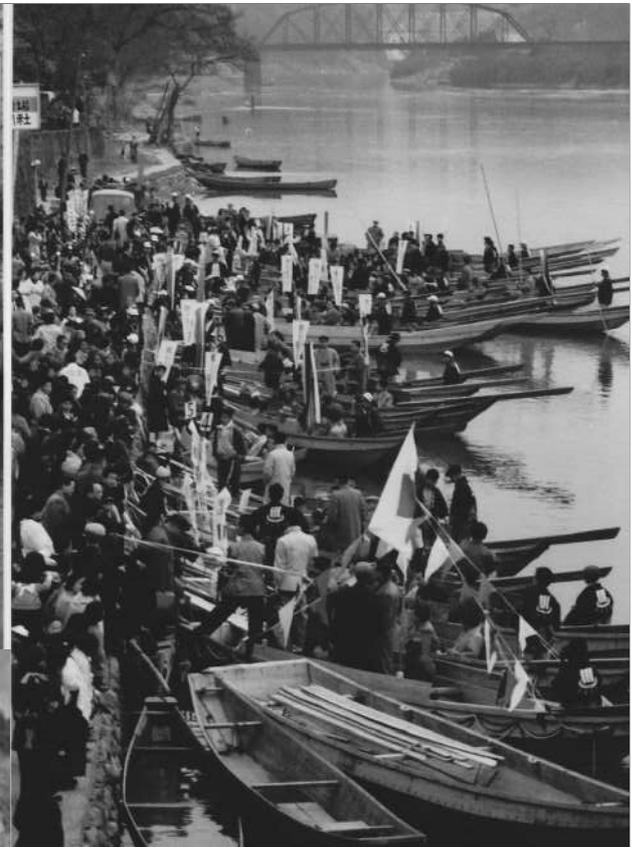
利水農家：  
利水の問題

漁業者：  
漁業権の問題

ダムが川を  
破壊した

水害体験者：  
ダムによる水害の問題

一般市民：  
民主主義の問題





「昔の川が失われてしまったのが悲しい」

「目の前にあるのに孫を泳がせられない」

「死んだ川」



## 体系化を促す契機としての 住民討論集会・森林保水力の共同検証

潮谷義子知事(当時)

- 漁業補償の否決
- 安価で有効な治水代替案
- 治水と環境をテーマに計9回
- 森林保水力の共同検証へ
- 県コーディネート、公開、根拠を示した主張と質疑
- 2001年から2005年まで



# 反対運動にとっての意味・・・

基本高水を学び、専門家に計算を依頼

→一つとして同じ数値はなし

共同検証は場所の選定と検証の方法に手間取る

→保水力ではなく浸透能調査に

- ・基本高水の概念そのものの正当性への疑問
  - ・既存の概念・研究成果による総括の困難
  - ・国の主張・対する既存の異論の論理と実感との隔たり
- 生活実感に基づく認識を総括しうる理論の模索へ

## フィールド調査

### ・洪水調査

「2日間440mm雨量で7,000t/秒の洪水が人吉地点で生じる」の検証



#### 1 雨量と流量から考えられること

2005年洪水		
人吉地点	国土交通省の基本計画	台風14号(2005年9月5日～6日)
2日間雨量	440ミリ	※1) 446ミリ(国の基本計画と同程度)
最大流量	7000トン(基本高水流量)	※2) 4500トン(国の基本計画の約64%)

2006年洪水		
	国土交通省の基本計画	平成18年7月豪雨(2006年7月18日～23日)
人吉	2日間雨量	440ミリ
		424.9ミリ(基本計画の約96.6%) ※1)
	最大流量	7000トン
		3600トン(基本計画の約51.4%) ※2)

今年の6月豪雨を2通りの方法で比較

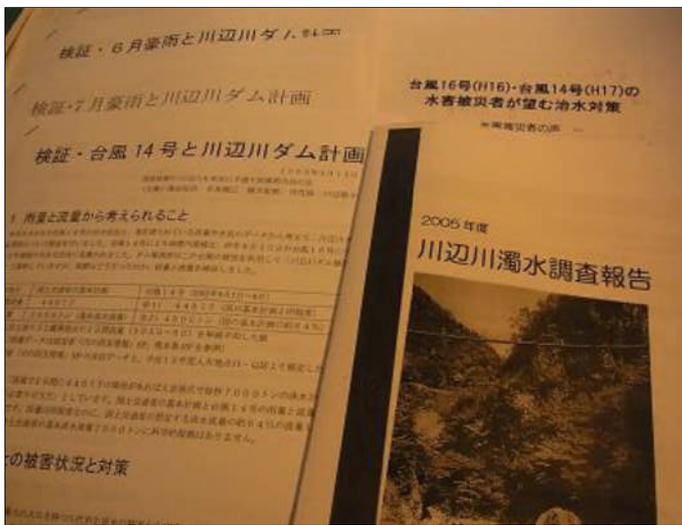
2008年6月洪水 2日間雨量の場合		
	国土交通省の基本計画	平成20年6月豪雨(2008年6月19日～22日)
人吉	2日間雨量	440ミリ
		289.5ミリ(基本計画の約65.7%) ※1)
	最大流量	7000トン
		3800トン(基本計画の約54.2%) ※2)

2008年6月洪水 12時間雨量の場合		
	国土交通省の基本計画	平成20年6月豪雨(2008年6月19日～22日)
人吉	12時間雨量	262ミリ
		189.5ミリ(基本計画の約72%) ※1)
	最大流量	7000トン
		3800トン(基本計画の約54.2%) ※2)

※1) 人吉上流の観測地点の2日間雨量、12時間雨量を単純平均した値  
(雨量データは国交省「川の防災情報」HP、熊本県HPを参照)

※2) 国交省「川の防災情報」HPの水位データと、平成13年度人吉地点H-Q図より推定した値





# フィールド調査

- 川辺川濁水調査
  - 漁業者、国交省、住民団体の共同調査
  - 河床堆積土砂の状況、濁り状況、崩壊箇所の調査
- 水害被害が望む治水対策調査
  - 未改修地区、内水被害、土砂堆積による水位上昇

## 本調査研究のまとめ

- ダム反対の基盤としての川の傍で生きてきた実感に伴う認識
- 実体験に基づく認識と科学的正当性を体系的に示す理論を一からつくりあげる契機としての住民討論集会と共同検証
- フィールド調査: 実際に見て回り、得たデータを検証する中で、生活実感に基づく認識の枠組みを意識化
  - フィールド調査を積み重ねることで、生活実感に基づく認識を体系的な理論的認識へと醸成

総合治水対策は以上の基盤と運動史とを経て完成したものであり、川の傍で生きてきた人びとが自らをも育む流域の豊かな自然と文化を後世へ遺すために、川と人との具体的なあり方を示したものである

# 参考文献

- ・五十年史編集委員会編 1988『五十年史』
- ・石田忠 1986、『原爆体験の思想化』未来社
- ・小出博編 1954、『日本の水害』東洋経済新報社
- ・球磨川流域・住民聞き取り調査報告集編集委員会編 2008『ダムは水害をひきおこす—球磨川・川辺川の水害被害者は語る—』花伝社
- ・熊本県防災消防課編 1966『昭和40年災害誌』
- ・黒田弘行 2013、「森論文に寄せて 川辺川ダム反対運動の特殊性 覚書」
- ・前山光則 1997(1979)『球磨川物語』葦書房
- ・----監修 2001『目で見る球磨・人吉の100年—写真が語る激動のふるさと一世紀』郷土出版社
- ・清流球磨川・川辺川を未来に手渡す流域郡市民の会 2013、『脱『基本高水治水』研究誌—自然の川を未来に手渡そう—』
- ・高橋裕 1971『国土の変貌と水害』岩波新書
  
- ・熊本日日新聞
- ・朝日新聞